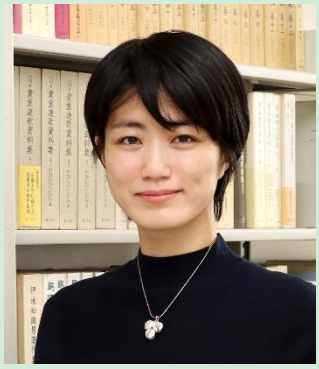

生田　慶穂
人文社会科学部
准教授

産休・育休取得期間
約半年
(2022.8-2023.2)

出産
2022.10 (第 1 子)

覚書

◆10 月出産は大学教員にとってやりやすいスケジュールでした。つわりのつらい妊娠初期が春休みに、安定期が授業期間に、妊娠後期が夏休みにおおよそ重なります。

◆同僚からベビー用品を譲ってもらい、とても助かりました。学内で子供用品をリユースする仕組みがあれば便利ですね。

◆男性が育休取得をためらう理由には、経済的要因もあるようで、ボーナスに響かない１ヶ月未満の取得にとどまるケースが多いようです。男性の育休に一定の有給期間が設けられれば、取得率が上がり、取得期間も伸びるかもしれません。

◆本稿執筆中、オルナ・ドーナト『母親になって後悔してる』（新潮社 2022）という本が話題になりました。子を持たないことが合理的な選択になりつつある現代、子を持つことの意味とは何か、本書を読んで考えさせられました。

半年で復帰するという選択

【産休・育休に入るまで】

妊娠がわかったのは、後期の成績処理を終えた２月半ばのことでした。まず、大学の男女共同参画推進室（現ダイバーシティ推進室）に問合せ、産休・育休制度の概要を教えてもらいました。「山形大学教職員のための出産・子育て・介護に関する制度」というパンフレットがとても参考になります。ただし、担当授業や卒論指導はどうするのか、といった教員業務の調整については何も情報がありませんでした。そこで、男女共同参画推進室主催の「女性研究者の集い」に参加し、産休・育休の経験がある女性教員に直接話を聞いて情報を集めました。産休・育休取得教員の担当授業ついては、文系分野では非常勤講師を依頼することが多く、理系分野では学部の他の教員が分担することが多いようでした。文理問わず、卒論指導となると肩代わりが効かず、産休・育休中も色々と工夫をして指導を続けたそうです。

３月、コース長に妊娠を報告し、学部長・教務担当にも話を通し、非常勤講師を雇用するための予算確保を依頼しました。科目によっては不開講とする選択もあり、教務委員と相談しながら対応を決めていきました。まだ安定期ではありませんでしたが、思い切って早めに動いたことで、非常勤講師を探す時間が十分に確保できてよかったと思います。幸い、つわりは軽く、眠気や倦怠感を覚える程度で、急に仕事を休むことは一度もありませんでした。とはいえ、入試業務にあたる際には、同僚に妊娠とつわりの症状を打ち明け、ミスが出ないようサポートを頼みました。また、産休・育休中の研究費の取扱いについて、あらかじめ担当部署に確認しておきました（現状、運営費は学会費など実働を伴わない最低限の執行可、科研費は執行不可）。

そのほか、新年度に入ってから行ったおもな調整や手続は次のとおりです。４～５月：非常勤講師の選定と雇用手続。入試委員・入試課に入試業務に携われない期間を連絡。６月：ゼミ生に妊娠報告（産休・育休中もオンラインで卒論指導を続けることを説明）。７月：人事・労務担当に書類提出（出産前に出すもの）。８月：次年度繰越不可の科研費を全額執行。10 月：人事・労務担当に書類提出（出産後に出すもの）。

【産休・育休に入ってから】

10 月下旬出産予定で、産前休暇８週、産後休暇８週、3 月には復帰して新年度に備えるという計画で、育休は 2 月いっぱいまでで申請をしました。

大事なことなので、お金の話にもあえてふれておきます。現状、産休は有給、育休は無給です。ただし、育休中は育児休業給付金（原則、180 日まで賃金の 67%、181 日から１年まで 50%）が支給され、育休期間に応じて期末手当と勤勉手当は減額されます（1 ケ月未満は減額なし）。そして産休・育休期間は、共済組合掛金が免除されます。現状、3 歳未満の保育料は高額なので、育休による減収と復帰による保育料とを天秤にかけつつ、夫が在宅勤務可能ということもあって、私はできるだけ早く復帰する道を選びました。

――と、ここまでが産前に執筆した部分になります。産後は何かと慌ただしく、なんと認可保育所の４月入所の申込締切をうっかり逃してしまったのでした（山形市は待機児童ゼロと知って、のんびり構えていたのがいけませんでした）。５月入所に望みをつなぎ、予定通り３月復帰を目指しますが、どうなることやら……。

【産休・育休が明けて】（原稿執筆時点で産休中）

【最後にひとこと】

上記のような情報をかき集めている間に、（…そうだ、体験談を集めて学内で公開しよう！）と思い立ちました。ダイバーシティ推進室に企画を持ち込み、年度内公開を目標に動き始めました。執筆にご協力頂いた皆様に、この場を借りて深く御礼申し上げます。